

ひと

しらい たかゆき
白井 隆之 さん(61)

公園の木陰に自転車を止め、後ろの荷台の屋根を開けて、自ら出版した本を並べる。即席の本屋だ。

「おもしろいね」と声をかける男性。よりよち歩きで近寄る男の子。「本作りに必要なのはまごころ」という話をしたら、共鳴して翌日も来てくれた人もいた。

札幌市内を4日間回り、売れたのは7冊。だが、「ここに来なきゃ、この出会いはなかった」と喜ぶ。

東京で出版社を起こして36年。1年のうち4カ月は、新刊をリュックに入れ、全国の書店や学校を歩いて回った。自転車を使いたかったが、生後間もなくかかった脳性まひの後遺症で、バランスが取れない。昨春、荷台付き三輪自転車の記事を読んでひらめき、長崎県の業者に特

注。この春、完成した。シムで体を鍛えて備え、今月から店開きした。

「自転車なら行き交う人と触れ合える。まわりの景色が見える」

幼いころ、運動会の徒競走が嫌で仕方なかった。でも、速く走れない分、周囲がよく見えた。寄せられた拍手や声援に気づき、「自分はこのままでもいいんだ」と思えた。

以来、障害を気にせず、したいことに取り組んだ。大学時代は学生運動に参加。出版社ではキリスト教や福祉の本を中心に約350冊を世に送り出した。書店への流通ルートにも乗せているが、行商にこだわる。

「本は人と人で作るもの。どんな気持ちを含めたのか直接伝えたい」次は広島のまちを走る予定だ。

文・写真 佐々波幸子

